

千葉県東京湾奥部における クロアジサシ *Anous stolidus* の記録

鎌田泰斗^{1),*}・富田健斗¹⁾・伊藤玲駆²⁾・平田和彦^{3),**}・関島恒夫¹⁾

¹⁾新潟大学農学部

²⁾新潟大学大学院自然科学研究科

³⁾千葉県立中央博物館

^{1),2)}〒950-2111 新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050

³⁾〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

* E-mail: kamata@agr.niigata-u.ac.jp

** E-mail: k_hirata@chiba-muse.or.jp

(受付日: 2020年10月31日, 受理日: 2020年12月26日)

要旨 クロアジサシは、千葉県ではこれまでに2例の観察記録が報告されており、「日本鳥類目録改訂第7版」では千葉県におけるステータスはPV (Passive Visitor) とされている。筆者らは、2020年7月7日に東京湾奥部の千葉市検見川の浜で、クロアジサシの幼鳥1羽を観察した。本稿は、千葉県3例目となる本個体について報告するとともに、未発表の2例の観察記録についても示す。千葉県で過去に記録されたこれら5例は、いずれも荒天に伴う偶発的な迷行であることから、千葉県における本種のステータスはIV (Irregular Visitor) もしくはAV (Accidental Visitor) として見直される余地があるだろう。

キーワード: *Anous stolidus*, 海鳥, 検見川の浜, 千葉県, 千葉市, 迷鳥

クロアジサシ *Anous stolidus* は、世界中の熱帯・亜熱帯の島や沿岸で局地的に繁殖分布するチドリ目カモメ科の海鳥である (中村登流・中村雅彦, 1995)。日本では八重山諸島、尖閣諸島、小笠原諸島、硫黄列島、南鳥島などに夏鳥として渡来し、繁殖する (日本鳥学会, 2012)。繁殖地から離れた海域では北海道、本州、伊豆諸島、九州、琉球諸島の各地で迷行例があるが (日本鳥学会, 2012)、その出現は稀である (真木ほか, 2014)。

千葉県ではPV (Passive Visitor) とされているが (日本鳥学会, 2012)、公表された観察記録は1989年8月の銚子市利根川河口 (桑原ほか, 2006) と1998年9月の習志野市谷津干潟 (石黒ほか, 2000) における2例があるだけで、他には2016年8月の銚子市利根川河口 (箕輪義隆, 私信) と2019年8月16日の千葉市美浜区検見川浜 (白川浩一, 私信) における未公表の2例が知られるのみである。筆者らは、これまでに観察記録が少ない千葉県内で本種を確認したので、ここに報告する。また、過去の文献記録において混乱を招く記述が認められたので整理するとともに、本県における本種の飛来状況について考察する。

観察記録

観察日時・環境

千葉県千葉市美浜区の検見川の浜 (図1; 北緯35度37分20秒, 東経140度3分11秒) において、2020年6月23日から同年7月7日にかけて計12日間の鳥類観察を行っていた中で、7月7日午前6時48分にクロアジサシ1羽 (以下、当該個体) を確認した。観察地点から、沖約100 m の距離で当該個体を発見し、8倍の双眼鏡で観察したのち、600 mmの望遠レンズ付デジタル一眼レフカメラで撮影した。

観察地である検見川の浜は、東京湾奥部に位置する1998年に整備された人工海浜である。浜辺内にコアジサシ *Sterna albifrons* の保護区域が設置されており、2020年6月初旬からコアジサシのコロニーが形成され、最大で成鳥約400羽が飛来していた。検見川の浜は、好天時はスタンドアップパドルやウインドサーフィン、ビーチバレーなどのマリンスポーツで賑わうレジャー環境であり、隣接している突堤上では連日釣り客が見られた。

2020年6月30日から7月7日にかけて検見川の浜では、強い南風と時折激しい降雨が認められ、その間マリンスポーツおよび釣り客はあまり見られなかった。当該個体を発見した7月7日の天気は小雨で、視界は良好で、観察していた鳥の色彩が十分に判別できる光線状態であった。



図1. 観察地および観察されたクロアジサシ *Anous stolidus* の飛翔軌跡。

観察地の位置を示す。斜線は観察地内に形成されたクロアジサシのコロニーの範囲を、白丸は観察地点を、白矢印は観察されたクロアジサシの飛翔軌跡を示している。

Fig 1. Observation point (open circle) and track (white arrowed line) of Blown noddy *Anous stolidus*.

ものの、平均風速11.2 m/s、最大風速13.8 m/s、最大瞬間風速23.0 m/sの強風日であった（気象庁, 2020）。

観察された行動

発見時は、観察地点から沖約100 m先で飛翔しており、その後少しずつ波打ち際に近づきながら飛び続け、沖約30 m先で南東に方向転換し、そのまま海岸線に沿って、飛び去っていった。観察時間は約20秒であった。観察中に、発声や休息、採餌等の行動を示すことはなかった。

外部形態

体型は細長くスマートで、翼は長く先が尖り、嘴はカモメ類よりも細く尖り、尾羽は燕尾型のコアジサシとは異なり紡錘型であった（図2A）。体長はコアジサシと比べて1.5~2倍ほど大きく、堤防近辺を飛翔していたウミネコ *Larus crassirostris* よりもやや小さかった。体色は、全身黒褐色の羽毛に覆われており、嘴や足も黒褐色で、白色のアイリングが認められた（図2A, B）。

考察

種同定および齢の検討

細長くスマートな体型や長く先が尖る翼、カモメ類よりも細く尖る嘴の形状から、当該個体がチドリ目カモメ科アジサシ亜科の一種であることは明らかであった（中村登流・中村雅彦, 1995）。アジサシ亜科のうち、全体的に黒褐色で白色のアイリングを有する種は、クロアジサシ、ヒメクロアジサシ *A. minutus*、インドヒメクロアジサシ *A. tenuirostris* の3種に限られる（Harrison, 1985）。

当該個体は額から頭上にかけて目立った白色部はなく、体の他の部分と同じような黒褐色をしていた（図2A, B）。ヒメクロアジサシとインドヒメクロアジサシは、すべての齢、羽衣において、額から頭上にかけての白色が顕著であることから（Harrison, 1985; Howell & Zufelt, 2019）、当該個体とは一致しない。クロアジサシの成鳥は、額から頭上にかけて白色で、後頭から後頸は灰白色を呈する。一方で同種の幼鳥は、額に白色部がわずかに出る程度であり（Harrison, 1985; 真木ほか, 2014; Howell & Zufelt, 2019）、全身が黒褐色に見えた当該個体の特徴と一致する。

以上より、当該個体はクロアジサシの幼鳥であると同定した。

飛来の要因

一般的に、熱帯・亜熱帯性の海鳥が通常の生息域を超えて北上する背景として、台風などの気象条件が関連することが多いとされる（水谷ほか, 2012）。観察期間に台風は発生していなかったものの、梅雨前線の影響から、千葉市では降雨および南からの強風が続いており、観察日は特に強風日であった（気象庁, 2020）。これらのことに加え、調査期間中にクロアジサシが観察されたのは本報告のただ一度のみであったことを考慮すると、当該個体は6月下旬から続いていた強い南風の影響を受けて、通常の生息海域である太平洋の南海域から迷行したものと考えられる。

過去の記録

千葉県におけるクロアジサシの観察記録は、筆者らが調べた限り過去に2例の報告があった。1例目は、1989年8月6日の銚子市利根川河口における1羽である（桑原ほか, 2006）。当日に銚子地方気象台で最大瞬間風速30 m/sを記録した暴風雨（気象庁, 2020）に伴う迷行であると

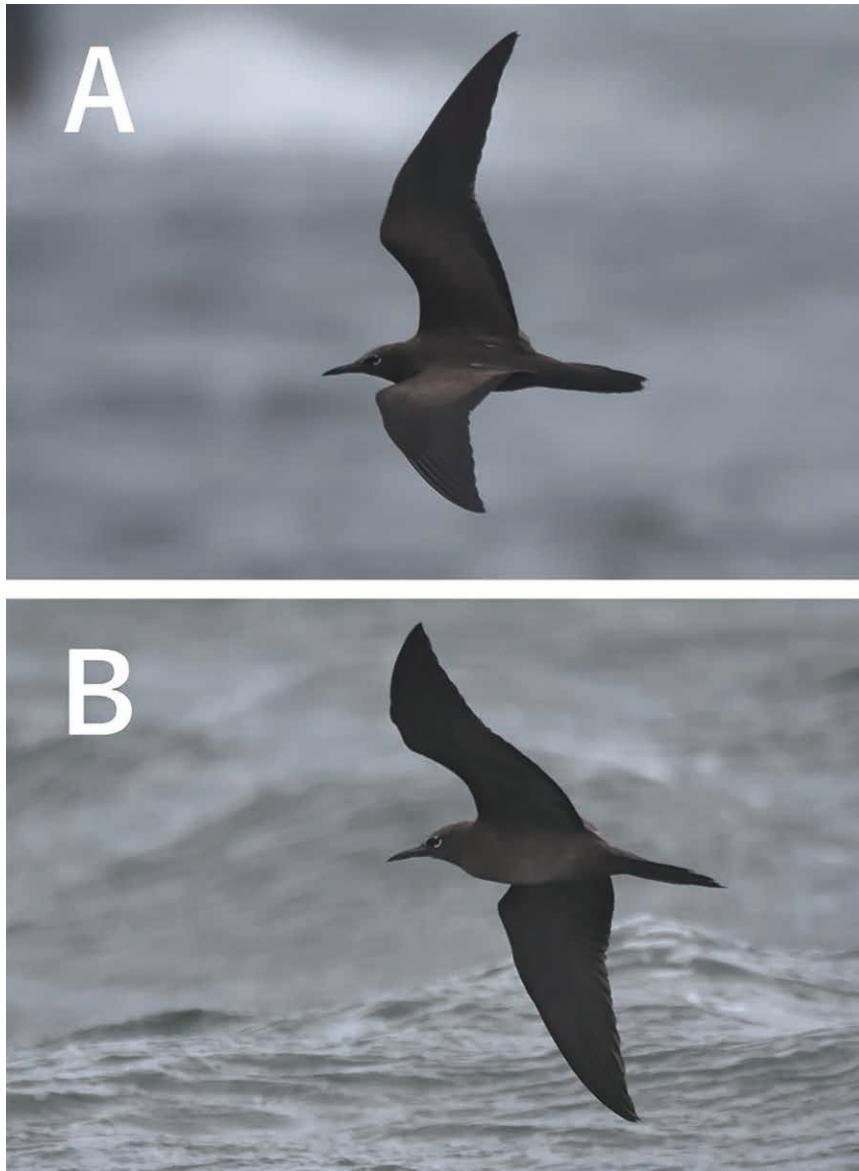


図2. 検見川浜から観察されたクロアジサシ (A: 斜背面, B: 斜腹面).
 Fig 2. Blown noddy *Anous stolidus* observed at Kemigawa-no-hama, Chiba City (A: obliquely dorsal view, B: obliquely ventral view)

考えられる。2例目は、1998年9月16日の習志野市谷津干潟における記録である（石黒ほか, 2000）。当日に千葉特別地域気象観測所で最大瞬間風速40.3 m/sを記録した大風（気象庁, 2020）に伴う迷行であると考えられる。そして、本報告は桑原ほか（2006）と石黒ほか（2000）に次ぐ県内からの3例目である。

なお、2例目の石黒ほか（2000）には4羽の写真と1羽の写真がそれぞれ1枚ずつ掲載されているが、個体数は明示されていない。観察地の谷津干潟自然観察センターに照会した結果、日誌に5羽（成鳥4羽、幼鳥1羽）と記録されていたことがわかり（谷津干潟自然観察センター私信）、石黒ほか（2000）の写真はその全個体を収めたものと考えられた。千葉県史料研究財団（2000, 2003）にも谷津干潟における記録が引用されているが、出典は明示されていない。千葉県史料財団（2000）では、観察個体数は1羽とされており、石黒ほか（2000）の記録に一致し

ない。しかし、観察年月は1998年9月と明記されており、一致する。過去に谷津干潟でクロアジサシが観察されたのは石黒ほか（2000）のただ1例であること（谷津干潟自然観察センター私信）も考慮すると、千葉県史料財団（2000, 2003）の記録と石黒ほか（2000）の記録は同じ観察に由来するものと考えられる。

この他、未発表の観察記録が2例得られた。1例目は、2016年8月30日の銚子市利根川河口における成鳥1羽である（箕輪義隆, 私信）。当日に銚子地方気象台で最大瞬間風速24.2 m/sを記録した前夜から続く大風（気象庁, 2020）に伴う迷行であると考えられる。2例目は、2019年8月16日の千葉市美浜区検見川浜における成鳥1羽である（白川浩一, 私信）。当日に千葉特別地域気象観測所で最大瞬間風速21.3 m/sを記録した大風（気象庁, 2020）に伴う迷行であると考えられる。

「日本鳥類目録改訂第6版」(日本鳥学会, 2000)では、クアロジサシは本州でPVとされているが、千葉県からの記録はない。「日本鳥類目録改訂第7版」(日本鳥学会, 2012)で初めて千葉県からの記録が認められ、第6版(日本鳥学会, 2000)を踏襲して本州や九州、伊豆諸島の他地域と同じくPVとされている。本報告と過去の報告、未発表の観察例の5例はいずれも暴風雨などの荒天に伴う偶発的な迷行であることから、千葉県におけるステータスはPVではなくIV (Irregular Visitor) もしくはAV (Accidental Visitor) が妥当と考えられる。繁殖地から離れた地域への飛来は、千葉県以外の各地についても迷行と考えられていることから (e.g. 中村登流・中村雅彦, 1995; 真木ほか, 2014; 叶内ほか, 2014), 各地における本種のステータスは、今後、再検討されるべきであろう。また、より精度の高い再検討がなされるために、私蔵されている観察記録をお持ちの方には、ぜひ積極的に公表いただきたい。

謝 辞

箕輪義隆氏、白川浩一氏、谷津干潟自然観察センターには千葉県におけるクアロジサシの過去の記録についてご教示いただいた。また、箕輪義隆氏には当該個体の齢に関する有益な情報もいただいた。本研究は、(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費(4-1803)により実施した。お世話になった皆様、団体に御礼申し上げる。

引用文献

- 千葉県史料研究財団. 2000. 千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物 2 海の動物 県史シリーズ46. 813 pp. 千葉県, 千葉市.
 千葉県史料研究財団. 2003. 千葉県の自然誌資料 千葉県産動物総目録. 378 pp. 千葉県, 千葉市.
 Harrison, P. 1985. Seabirds. 448 pp. Christopher Helm, London.
 Howell, S.N.G. and K. Zufelt. 2019. Oceanic birds of the world. 360 pp. Princeton University Press, Princeton.
 石黒夏美・桑原和之・箕輪義隆. 2000. 東京湾海上の鳥類相 (1996~1997年). 所収 桑原和之・箕輪義隆・石黒夏美・嶋田哲郎 (編), 東京湾の鳥類. 42 pp. たけしま出版, 流山市.
 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄. 2014. 新版日本の野鳥. 672pp. 山と溪谷社, 東京.
 気象庁. 2020. 各種データ・資料. 過去の気象データ検索. <https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> (最終閲覧日: 2020年10月22日).
 桑原和之・三沢博志・箕輪義隆・野口一誠・繁倉 崇・奴賀俊光・高木 武. 2006. 銚子市鳥類目録. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 14: 71-147.
 真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 決定版日本の野鳥650. 788 pp. 平凡社, 東京.
 水谷 晃・村越未来・松崎 茂・山田智子・長嶺 隆・河野裕美. 2012. アカアシカツオドリ若鳥の保護と長期飼育後の放鳥. Strix 28: 149-163.
 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304 pp. 保育社, 東京.
 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 345 pp. 日本鳥学会, 帯広市.
 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 438 pp. 日本鳥学会, 三田市.

The Occurrence of the Rarely Recorded Blown Noddy *Anous stolidus* in the Interior of Tokyo Bay, Chiba Prefecture, Japan

Taito Kamata^{1)*}, Kento Tomita¹⁾, Reiku Ito²⁾,
 Kazuhiko Hirata^{3)**}, Tsuneo Sekijima¹⁾

¹⁾ Faculty of Agriculture Niigata University

8050 Ikarashi-ninomachi, Nishi-ku, Niigata 950-2181, Japan

²⁾ The Graduate School of Science and Technology of Niigata University

8050 Ikarashi-ninomachi, Nishi-ku, Niigata 950-2181, Japan

³⁾ Natural History Museum and Institute, Chiba
 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan

* E-mail: kamata@agr.niigata-u.ac.jp

** E-mail: k_hirata@chiba-muse.or.jp

Two observation records of Brown noddy in Chiba prefecture have been reported so far, and the local status of this species in Chiba prefecture is PV (Passive Visitor) in the "Check-list of Japanese birds, 7th revised edition". On July 7, 2020, we observed a juvenile of Brown noddy on the Kemigawa-no-hama in Chiba city, the interior of Tokyo Bay. This paper reported on this individual, which is the third record in Chiba prefecture, and also shows the observation records of two unpublished cases. Since all of these five cases recorded in the past in Chiba prefecture are accidental strays due to stormy weather, the local status of Brown noddy in Chiba prefecture may be reviewed as IV (Irregular Visitor) or AV (Accidental Visitor).

Key words: accidental visitor, *Anous stolidus*, Chiba prefecture, Chiba city, Kemigawa-no-hama, seabirds